

二十一日

「吾存在す」これは自分にとって最初の事実であり、最初の命運であり、最初の驚異であった。

自分は確かに茲に存在している。茲とは宇宙であり自然である。自然と宇宙は極まりなく大きく、限らない力をもっている。人は茲で生死する。されば自分にとって自然これは何ものか。宇宙は何ものか。

どんなものも自分からこの驚異を消すことは出来ない他の人々も生死する。これは

事実である。しかしこの事実で自分の存在の事実でやわらげることが出来ない。自分は確かに茲にあるからである。

と、存在の意義を探り

嗚呼吾が生、畢竟如何、何を信じ、何を為し、何を楽み何に安すんず可き。

神か、善か、人情か、美か、進歩か

若し真に然るを得ば幸ひなる哉。悲ひ哉。人間！

愚なり、弱し。

愚なり、弱し、然かれども吾が存在は存在なり。神

国木独歩の

佐伯での生活

(二十九)

存しますならば神存します也

と、吾の存在の意義を明らかにしようと考えて、結局、神にすがっている。

次に

昨日は日曜日、好天気、午前教会堂に出席して感話した。午後は富永・山口・収二たちと小学校の宿直室に飯沼源二君を訪ねて快談に時を移した。

四五人を伴ふて城山へ登る。そして

夕陽將に酣なり。山々、疊々相重り、蔭紫色に青空は遠し。水流、黄熟の野を回流す。其の美言語に絶すと、山上の夕空を叙してある。

昨夜も教会堂に出席して感話した。

山内武麒

(賛助会員・佐伯市城下東町)

かに感じた。

昨夜の月の美しさ。そして月を見乍ら一人靜

然り、宇宙は無限なり、自然は冷然、頑然、默然、

而して活動不止、人間は茲に生死す、如何に生く可き

何を心靈の力となす可き。信仰か、何の信仰か

然り、吾れ人情を信ず 愛を信ず 美を信ず、

而して神を全信確信すと言はんと欲す、
されど言ふ能はず、神を疑ふ能はず、されど吾が確信
は實際の上に於て弱し、之れ吾の弱き也

されど吾は美と情を信ず

嗚呼全き法則、全きものよ、則ち自然よ。

爾は母か、土か、盲力か、善意か。

と、神の信仰にまだ自信が持てないが、美と情とを信じている。愛と情との全きものは自然であると、信じている。

次に

人情とは何ぞや、嗚呼ヒーマンライとは何ぞや。

と、問うて、人情について詩を詠じている。

山谷の茅屋に響く声

孤鳴の漁村に起る歌

嘗て戦營の兵士の夢みし夢

月光のもと、明花の傍

風雨の夜、雪の夜。

感ぜざらんと欲して能はざるもの

母の夕の子守り歌

友のあしたの離別のこゝろ

嗚呼人情とは何ぞや、人の心のなみだのみ。甘露の
如き涙のみ、古今東西の人の情けのみ、
と、結んである。

二十二日

昨夜、雨繁風強し、悠然として哀情多し。

他の「吾」を思ふ、而して又た古人を懷ふ。

カーライルは何処にあるか。彼が叫んだ声は書物の中に印刷されて今自分の傍にある。しかし、彼は今何処にあるか。ウォーズウォースは何処にあるか。シエクスピアーは何処にあるか。

彼らの詩想が高尚であればある程、彼らが今ないのが不思議である。賢者、詩人、聖人はみんな逝った。あ、生れたものはみな逝く。「生」の国民は「死」の国民である。

東坡は何処にあるか。赤壁の下で月光を仰ぎ、江流に舟を泛べて古英雄を弔い、むなしさを感じた東坡はどこにあるか。

みなどこにあるか。

と、古人を偲んでいる。

宇宙は全体である。神は全体の心であり、全体の善、全体の美、全体の真である。

全体はホール、そうだが全体は全体である。過去も、未来も全体の一部分であつて、時、空間の無限こそ全体であり、生死も全体である。

われ／＼はこの全体から離れて何処へ逝くべきか、全体の美と真とから離れて何を求め何を信じて何によるべきか。

と、雨の夜に感懐したことを記してある。

二十四日

昨日石崎ため子さんから手紙がきた。処身のことについて心配して自分に色々と相談をもちかけている。女子の処身についてはあわれむものがある。殊に教育を受けている今日の女子の立身法に苦しむのは、わけて同情に堪えない。

このため子は石崎家の四女で、この頃山口高等女学校を卒業し、独歩を頼つて上京したいと考えていた。

今夜すぐ布浦策平氏に手紙を出し、ため嬢のために小学校の教師の職を周旋してくれるように頼んだ。

布浦氏は山口県熊毛郡曾根村の素封家で地方自治に尽粹した。麻郷村の吉見家や石崎家と親しくしていたので独歩とも知り合っていた。

今井君から今夕手紙がくる。同君もまた精神病にかゝつていとのこと、手紙を出して慰めた。

今日、峰泰世君（元鶴谷学館生徒、今神戸に行つてい）から手紙がくる。すぐ返事を出す。

昨夜富永君が来訪した。

夜が更けて弟と一しよに月を踏んで田野を散歩した。

次に

「吾」と「宇宙」との真の関係を直覚したいものである。

この宇宙はホールである。ホールである宇宙と自分とに何の関係があるのか。知らねばならない。直覚せねばならない。信仰をたしかめなければならぬ。

と、ある。

二十四日

嗚呼不定にして迷へる生命なる哉

浮き草の如き思想と感情なる哉

明言す、吾と宇宙との関係は甚だ曖昧なり

明言す、故に明言す。

吾は喜ぶ可き権利なく、恐る、可き理由なく、恐る可き権利なく、誇る可き権利なし。

と、自分は不安定で浮き草のようだと強く反省して

しかし世の人みなそうである。自分より一層そうあるかも知れない。

しかしそれだからと云って安んじていることは出来ない。

実に浮薄な生命である。

宇宙はホール也

吾はホールの中心なり

吾に、より昔なくより未来なし

吾、存在す。吾存在す、然り。

存在は真面目の事なり、吾には真面目の事と見ゆるなり

しかし自分は自分をよく知らない。自分は善人であるか、悪人であるか、強い人か、智があるか愚者か、実によく知らない。

たゞ知っている。吾は吾であって宇宙は宇宙であるこ

と。生命は真面目であることを、以前に生れた哲人達に

よつて唱道されたが、自分にとっては依然として生命は最大で最初で最後の事実であり問題であることに変わりない。

自分は断じて不定な生命を願わない。

自分は今日のわが生命が不定で活動であったことをさとらなかつたか。覚っていた。これは強いもの得る一端であり、明光に至る一端である。

と、感懐している。

二十六日の記を見ると、

「昨日の記は、昨夜教会堂に在りて感じたるもの也」と、書いてある。教会で感じたことである。

二十六日

自分は先人にとらえられた妄想の生活を強く排斥するこい願わくば自分をして最も冷やかで、明るく、美しく清い自然に立たしてくれ。

わが情、意はすぐ動き出し転ずる。

わが命は実に影の如く浮草のような命である。

嗚呼宇宙はホール、吾は人、

吾如何に生き可き、

真実に不変の望と喜びと力と来れ

神は吾に遠し

吾は何事も知らず。

昨日中桐君から同君の著述である哲学変遷史を送ってきた。今夜その上代哲学を読みあげた。

一昨日薬師寺氏が大分から帰って、兼ねて頼んであった源平盛衰記と保元平治物語の二冊の本を購入しもって帰って来てくれた。もう少し読んだ

今日、国元へ手紙を出す

昨日国元から手紙が来て、父が脳病であると報らせた。きた。

次に

自分の今の心情は満足もせず失望もしないたゞうつ勃と意気に燃える。

宇宙は漠然としている。

自分の行為に感情に一定した真面目さがない。すぐ高ぶったり乱れたりする。浮雲のようである。

宇宙の真体は不変で靈妙最高なものである。自分の心はこれに遠ざかっているのである。

だから一定しないのである。

美と生命と希望と真実と来れ

吾を動かすものは俗情多し

花よ、花よ、月よ月よ、

来りて吾を救へ。吾実に爾を愛するを希ふ。

と、自分の生活態度を反省し、もつと宇宙、自然と接した生活をしたいと念じている。

二十八日

昨日は日曜日。教会堂に出席しなかった。

水谷君から来状、すぐ返事を出す。中桐君へ手紙を出す。

午後は諸子と一しよに桂港（葛港）の海浜に行き、自分が最先に海に入り、今年初めての海水浴をする。

中桐に出した手紙は、哲学変遷史を贈ってくれた礼を述べ、その感想を記してある。

哲学史拝見仕り候。近代部の余りに大略なるは残念に候。小生は組織的哲学を愛せず又信ずる能はざる如し

哲学は智の領域なり智の領地は智自ら其のリミット

(限界)を作る。されど人間の情、到底有限に安んずる能はず。天地の玄妙は無限なり。人間の情たゞこれを冥想す。人間に在りて情は只だ其のリミットを作らず。リミットなきもの所謂の情の情たる所以。故に小生は只だ情を信ず。是れを以て余が涙甘露の如し。余の哲学(嗚呼若し此の殺風景なる文学を用ゆくんば)余の哲学は是れのみ。神は情なり故に無限なり、人間亦宜しく情を以て其のもとに帰るべきのみ。古来真の真人哲人の致、実に此の如しと余は信ずる也。

と、書いて、最後に、

故に月下笛を聴きつ、プラトリーを読んで始めてプラトリーに入るを得ん。

尺とり虫(科学者、哲学者) 何んで真理を知らんと、書き添えてある。

次に

自分の生命は只だ自分の出来心で支配されつ、ある。自分は糸の切れた紙鳶のようである。自分の出来心は風のように、漂々として一定しない。

吾に力なし、吾に喜びなし、吾に真の希望なし。

一言以てすれば吾に真の信仰なし。

と、反省し、

自分は自分を呪いたくなる。自分は地上での幸福は願わないが、心は暗く光がない。

万事をなげうつてた 光を求め、力を求め望みを求めべきか。

毎日の生活に何の意味があるか、たゞ一定しない喜怒哀楽の連絡に過ぎないではないか。よし、ま、よ、人間はこのように作られたものとあきらめるべきか
しかし、宇宙はホールである。自分の存在は自分にとつて避けることが出来ない、忘れることが出来ない、またあきらめることの出来ない事実であるのである。

やめよ、愚かな言葉を

吾は存在す。

他の「吾」を思へ、小我の煩熱を脱離せん

人情と美妙とを感じよ、喜びに入らん

神を仰ば、希望と勇氣に入らん

哲人達を思へ、高き情を得ん、

と、思い直して、これが今のおきてであると云っている。

そして

吾は歌て死なん

吾は歌て死なん　ア、然り

喜びも悲しみも、

感じたまに／＼歌ひなん

吾が心は人の心なり

吾が情は凡ての他の吾の情也

吾はたゞ歌はん

然り、吾の気楽と義務は是れのみ

と、詠じている

以上、毎日の生活を反省してみると、何かもの足らず悔いることが多い。他の吾を思う大我に生き、人情と美妙とを愛して真の喜びを得たいと心から希っている。

そして次に

睥視せよ、意味あらはれん

月を花を人を鳥を

墓を、川を、若しくは森を

嗚呼睥視せよ

意味は自からあらはれなん

夜を睥視せよ、星を大空を

と、詠んである。

次に

自分を動かすものは虚栄か、それとも恐れか、自分を動かすものは何か、習慣の悪魔か

吾が友は誰か、吾が喜びは何か

義務！

これ強き声なり、嗚呼義務！

これ吾を導く只だ蔽の道なり。

と、意気を高昇させている。

二十九日

犬・雀・蜻蛉・蛙、これらは自分の眼に映って一種の感じを与えた。今までなかったことである。

この宇宙、この宇宙での犬の生命、蜻蛉、蛙雀、これ何か、

彼らは生きている、彼らは自分と同じように生きている。彼らは自分自分で生活し、行動している。人間のよう

うに

彼らは死ぬ、そして自分も彼らと同じように死ぬ

べろと呼ぶ犬がいる。近所の家の犬である。自分に親

しみ、自分の声に感じてうれしそうにうなり鳴き、尾をふるのである。

この犬の心はどんなだろう。犬を呼ぶ、あ、犬、神は犬を作り給う。

冷然としたこの宇宙、無限無極のこの宇宙、その現象と法力とは、われらの生命の前後に横たわっているのは事実である。

わが生命！これは自分にとって最初の事実である。

このように感じてくると、言うに言われない神秘的な情が心の底から湧いてくる。

宇宙はホール、嗚呼古往今来、誰れか宇宙の外に生れ、宇宙の外に逝く可き。

吾は此の宇宙の人なり。

神！己に神と言ふ、爾の此の言にして真に爾に其の意味を有するならば、爾は続けて言へ。

義務！ 信仰！ 愛！ 美！ 勇氣！ 平安！ 満足！

嗚呼此の生命を此宇宙に感ず此宇宙は神の宇宙、出！ 出出！ 死の後に光あり

と、人の生命、宇宙、神と次々に考えている。

三十日の記には

光と暗を感じぬ。

宇宙はホールなり、生滅す、変転す。而して遂に宇宙の外に出ずる非ず、神に変ぜず

人間！

と、人間と宇宙との関係を記してある。

三十一日

この世は光と暗との戦争であり、神が支配している。

見よこの壮麗で極大で無限の宇宙を、

転々として一寸も休まないのである。

吾は吾の生命を感じる

宇宙はホールである。寂然としている。しかし生命はこのうちにある。こゝにある。

過去の人々、そしてその行為、その生命、その感情の凡て、その一厘一毛もこの宇宙から消滅しないのである。宇宙は凡てを包んで永久に立っている。吾は茲にある。

人間！ 人間！嗚呼人間！

宇宙はホールなり、ホールはミステリアス也。

と、宇宙と人間とについて記し、次に宇宙の詩を記して

ある。

嗚呼宇宙。―宇宙と呼びなす此のもの

過去も此にふくみ、未來も茲にふくみ

吾も亦此の如く在り。

星！ 日！ 花

禽獸草木のかず

變転し、上下し、生滅し、流行す。

ア、宇宙、ホールなる宇宙よ

凡ての現象、事實、思想、法則、傾向

包めて此のうちに在り

寂然として燃へ、默然として沸く。

見よ。諸々の人々の生活の現状を。

ア、此の宇宙に於ける此の人間！

兎も角もこれ吾なる人に取りては

最初最真、最中心の事實なり

吾は人間の情を信ず

宇宙の生命を信ず

生命の命を信ず

生命の目的を信ず

其の善、其の義、其の真を信ず

只だ暗黒は亦吾に在り。

光明は天に在り

吾は暗黒のうちに独居す。

故に迷ひ故にまどふ。

吾知らず吾知らず。

宇宙は冷然たる死物か、

宇宙は聖なる神のものか

宇宙はホールなり

ホールは死物か、死物なるホール如何に此の吾を生

みたる。

吾は生命を信ず。